趣意書

『勞働者の生活はその寢床に始まる』

毎日朝は五時六時から工場に吸ひ込まれる樣に出掛けて行く、そして汚ない喧ましい機械の側で監視人の鋭い眼の下で働く。十時間十二時間。日が暮れて眼も耳も手も足も使ひ盡して工場から吐き出される。それでもおれ達の足はいそいそと家路を急ぐ。しかしそこに何がおれ達を待つて居るのか。暗い電燈の下で貧弱な夕飯を濟ましたらもうそれで終ひだ。體は疲れてしまつて何一つする元氣もない。たゞ煎餅蒲團にくるまつて眠るだけのことだ。

おれ達の毎日毎日の生命は機械の奴隷となつて働くために捧げられて居る。かうして稼いで來るおれ達の給料は高い生活費を支拂へば後には幾何も殘らない。大切な子供の教育は思ひ、まさか間違へば其の日の煙が立ち兼ねる。それでも働いて居る間はまだよい。いよいよ失業となつた日には動きがとれない。

おれ達には時間の餘裕もなく金の餘裕もない。おれ達は何故こんな悲慘な生活をしなければならないのか。なる程おれ達には教育がない。財產もない。しかし考へて見るがいゝ。おれ達は勞働によつて人類の生活に必要な任務を果して居る。衣食住の資料は悉くおれ達勞働者の勞働の成果である。おれ達が働かなければ汽車も電車も動きはしない。夜は電燈が灯らない。世の中は眞暗だ。あらゆる產業部門に働くおれ達兄弟の血と汚によつてのみ人類はその生存を續け得る。かように重大な任務を果しつゝあるおれ達の生活はどうだ。僅かに暮して行るか行ないかの貸銀のために奴隷となつて居る。おれ達には自由もなければ希望もないのだ

おれ達が社會的任務を果す勞働を資本家はその懷を肥やす手段にして居る。資本家は工場主は、お情けで使つてやるといふ樣な顏をして居る。彼等は儲けのある時だけ、おれ達を使つて置いて儲けが少くなると人情も絲瓜もあるものか、どしどしおれ達を工場から追ひ出す。おれ達が飢ゑようと死なうと一切知らない顏をして居る。かうしておれ達の生存權は資本家のために、現在の資本家本位、利益本位の經濟組織の下に無視せられて居る。

更におれ達が家で使ふ砂糖や酒やその他の品物には消費稅がかゝつて居る。電車や汽車に乘れば通行稅を取られる。地方によつて戶數割といふ稅金がかゝつて來る。かうして集められた金で學校が建てられ大砲が造られ軍艦が造られ、軍人や警官や官吏が養はれる。しかしそれ等のものは一つとしておれ達に役立つてくれない。澤山の中學校、立派な大學はあるけれど、おれ達は小學校を卒業するかせない時に見習や徒弟に追ひやられてしまふ。また充實した軍備によつて戰爭に勝つたからとてまだ一度もおれ達勞働者の生活が豐かになつたことを聞かない。

戰爭の擧句おれ達に與へられるものは常に不景氣だ。失業だ。戰爭は何の爲めにやるのか。世界各國を通じてどの國でも資本家や地主の代表が議會で勝手に協議して戰爭を始める。そしておれ達の兄弟が工場から村から戰場に引張り出されて砲彈の餌食になる、資本家と資本家なら商賣敵で戰爭も起さなければなるまいが、社會人類の爲めに生產に從事して居るおれ達勞働者の間に戰を起す理由はありさうにもない。おれ達の敵はむしろ、おれ達を虐使してゐる資本家だ。おれ達の神聖な勞働者の生存權を無視する現在の資本家本位の社會組織だ。兄弟よ。さうではないか。おれ達がこれでは食へないからと云つて或る工場でストライキを起して賃銀値上げを要求する。警察は出來るだけおれ達を壓迫する。それで間に合はなければ軍隊まで繰り出す。資本家や教育家や官吏や僧侶達は口を揃へて『金のために、物質的利益のために徒黨を組んで騷ぐ。怪しからん。』と罵る。しかし諸君。資本家はおれ達の溫順な心を喰物にして出來るだけ安い賃銀でなるだけ長い時間働かせようとするではないか。おれ達はかうした苦しい經驗から知つて居る政治機關も軍隊も警察も學校も道德も法律も皆資本家本位のもので、おれ達を何時までも悲慘な賃銀奴隷として抑へつけて置くためにあるのだ。

兄弟よ　眞理に眼醒めよ。おれ達あらゆる產業部門の勞働者全体が働かなければ一日だつて社會全体の人が生存し得ないのにおれ達はかくの如く虐げられて居るおれ達は勞働階級全体の團結の力を以てあらゆる方面に向つておれ達の生存權を要求しよう。よりよき生活のための戰を開始するのだ、

兄弟よ起て！　起つて此の聖い戰に加はれ！

大正十三年八月

日本勞働總同盟　廣島合同勞働組合

申込

現住所	氏名	工場	職業

貴會ノ趣旨賛成ノ上入會申込ス　入會申込書